

### ・「お前がバカだからわかんないだけだ。いいからこれを読め」

放送前に下

読みをしていると、ある経済ニュースが、あまりに専門的でわかりにくかったことがありました。私は「視聴者の代表」。これをそのまま読んででも視聴者にはわかりません。「こんな原稿わかんないですよ」と言ったら、**経済部のデスク**は、こう言い放ちました。

「**わからないのはお前がバカだからだ**」

これは衝撃的でしたね。たしかに私はバカかもしれないけど、わからないまま読んで、視聴者がわかるわけではないでしょう。「お前がバカだからわかんないだけだ。いいからこれを読め」では、視聴者にとってわかりやすいニュースになりません。

### ・原稿にせずにメモにしよう

いま最終原稿と書きましたが、**理想的な発表とは、実は「原稿を書かない」**ことです。

原稿を書くと、どうしても本番で読んでしまいます。文章になっている原稿は、かいつまんで話すことがむずかしく、つい**ダラダラと読んでしまいがち**です。

聞かされるほうはたまったものではありません。「**原稿を読み上げるくらいなら、その原稿をコピーして渡してくれ。後は自分で読むから**」と言いたくなります。

また、読み始めてしまうと、目の前に聴衆がいても、視線はひたすら原稿を追いかけることになります。聞いている側は、自分が無視されているような印象を受けてしまいます。これでは発表の中身が頭に入りません。

また、原稿の文章は書き言葉です。硬くて親しみにくい表現が多くなります。

一方、**手持ちがメモだけなら、その場で自分で話し言葉にしなければなりません**。その結果、自然な日本語になります。

原稿の棒読みを避けられますから、聞き手の顔を見ながら話ができます。聞き手は、「ああ、自分に対して話をしてくれている」という気持ちになれます。これが大切なのですね。

### ・つかみ

大事なのは「**準備の段階で、つかみをきちんと考える**」ということです。

つかみや笑いをとるのは、確かに話し方の「**応用問題**」にあたります。とはいうものの、冗談や面白い話ができれば、こいつは面白いなあ、明るいなあという印象を与えます。最初のつかみでプレゼンテーション成功、なんてこともありえます。

失敗してもかまいません。面白い話をしようとして、「すべって」しまってもいいのです。みんなの注目を集め、講演や報告を成功させようと頑張っている姿勢を理解してもらえれば、聞き手の人たちは、苦笑いしながらも、温かく受け止めてくれるはずですよ。

### ・使いたくない言葉

話をしているうちに、「**ところで**」という言葉をよく使う人がいます。口癖なのでしょう。ですが、ひんぱんに使われてしまいますと、困ってしまいます。「話があちこち飛んでいく」という印象を与えるからです。

...

相手と話していて、自分では話が盛り上がっていたと思っていたのに、相手が突然「**話は変わるけど**」と言うと、話の腰を折られた気がします。

エッセイを読んでいて、「話は変わるが」と書いてあると、がっかりします。エッセイとは、自分の日常と、そこで感じた・思った心象風景を組み合わせ綴っていくもの。最初のつかみのエピソードから始まり、さまざまな話題が紹介された後、最初のつかみのテーマに戻っていくという文章の流れというものがあります。そこに「話は変わるが」というフレーズが入ってくると、「**この筆者は、一つのテーマでエッセイを書くことができなかったのだな**」とわかってしまいます。

...

「**こうした中**」という言葉が無造作に使われています。

私は、こうした言いまわしを聞くと、「**こうした中でというのは、どうした中でなんだよ**」

と突っ込みたくなります。前の文章と、後に出てくる文章を、論理的にうまくつなげることができないため、「こうした中で」という、実に漠然とした表現で誤魔化してしまうのです。

#### ・キーワード

「キーワード力」はどのようにして身につけることができるのでしょうか。一つには、とことん考えて詰めていくように努力することです。「自分はこれからこういうことを言いたい。もしひと言で言うと、どう言えるだろうか。要するにどういうことだろう」と考え抜くのです。そこからキーワードは生まれてきます。・・・  
キーワードを、話の「つかみ」にしたり、「さわり」で触れたり、要するに「こういうことです」という結論に使ったり。・・・  
キーワードを思いついたことで、サブプライムローン破綻のニュースをわかりやすく解説することができました。「お買い得な**福袋**だと思って金融機関が大量に買い込んだら、実は**闇鍋**だったのです」と。

#### ・『暗黙知のギャップ』

抽象的なキーワードは、最初ではなく最後に出して、話をまとめます。「子どもたちにこんな話をしたら『え、それどうして?』って聞かれるのです。『そんなことも知らないのか』とびっくりしましたが、私たち大人の常識を子どもたちは持っていないのは、考えてみればあたりまえです。大人はそれまで何十年も生きてきて、自然にそれらの知識を身につけてきたわけですから。それってつまり『暗黙知のギャップ』なんだと気がついたのです」